

# 組織目標評価報告書（平成23年度）

部局名： 資源植物科学研究所

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	自己評価
①-1 目標	大学院生を積極的に受け入れるため、説明会を3回開催した(うち1回は教員数名が地域を訪問し行った)。グローバル化を図るため、昨年から一部の授業を英語化しているが、これを外国人教員を採用することにより強化した。学生数、ポスドク研究者の数は昨年より若干減少しているが、留学生や外国人研究員は増加する傾向にある。
国内外から積極的に大学院生を受け入れ、植物科学分野の優れた人材育成を図る。そのため、大学院説明会を開催し、優秀な学生の確保に努める。また、教育環境の改善を図り、総合的かつ体系的な教育体制の検討を行う。さらには、国際的にも通用する人材の育成を目指し、英語による講義、指導を広く行うとともに、外国人教員や外国人研究員の採用を推進する。	
①-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
②研究領域	自己評価
②-1 目標	共同研究に資する機器として、超低温フリーザー、冷却遠心機等を整備するとともに、最先端機器に技術専門職員を配置し、効率的な運用を図った。4月より、テニュア・トラック制度を導入し、所内助教8名をテニュア・トラック助教に切り替えた。さらに、国際公募により、2名の新任テニュア・トラック助教を採用した。科研費の採択件数は増加したが(26→31件)、総額では若干の減となった。しかし、若手(A)が2件採択されるなど、若手助教の躍進が認められた。また、発表論文数とインパクトファクターの合計はともに、過去5年間で最高となった(研究者ごとではなく、研究所の総数として計算)。
共同利用・共同研究拠点としての役割を十二分に果たすため、共同研究に適した施設整備を行い、植物遺伝資源・ストレス科学に関する共同研究を積極的に進める。具体的には、最先端設備等へ技術職員を配置し効率的な運用を図る。また、国内外の研究者との連携を強化し、植物科学の研究基盤の底上げを図るとともに、その中心的役割を果たす。さらには、新しい研究分野の創出を計るために、テニュア・トラック制度を積極的に導入し、優秀な若手研究者の獲得を目指す。	
②-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
③社会貢献(診療を含む)領域	自己評価
③-1 目標	研究所公開、公開講座、高校生体験プログラム等を開催し、昨年以上の参加人数を得た。さらには、大原農書等の貴重図書の公開も行った。これらの積極的な広報活動により、近隣の小中高からの見学依頼や共同研究の問い合わせが増加している。
これまで以上に、積極的に情報を発信し、倉敷・岡山周辺地域との連携を強める。そのため、これまで行ってきた研究所公開、公開講座、高校生体験プログラム等を強化するとともに、積極的な広報活動を展開する。さらに、中国・四国地域での産業創出を目指し、シーズとなる共同研究を進める。	
③-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
【総括記述欄】	
研究所の本来の目的である研究面においては、これまで以上に成果が出ている。一方で、これらの成果を教育面に反映させる試み(大学院生確保のため説明会を複数開催するなど)については、まだ十分な成果が出ていない。今後岡山大学として優秀な人材を育成するために、当研究所も労力を惜しまないが、他部局の協力も不可欠であり、大学を挙げての取り組みに期待したい。	